

「わたしの羊を飼いなさい」 (ヨハネ21:15-25)

挽地茂男

2020.4.19 日本基督教団千歳丘教会

皆さんよくご存じのマザー・テレサ〔1910年8月26日-1997年9月5日〕は1929年から1947年までの18年間カルカッタ(現在のコルカタ)の聖マリア学院で地理と歴史の教師として働いていました。ユーモラスな彼女の授業は、学院の女学生達の間で大変な人気だったということです。1944年には聖マリア学院の校長に任命されます。上流階級の子女の教育にあたりながら、テレサの目にはいつもカルカッタの貧しい人々の姿が映っていました。1946年の9月、休暇のため避暑地であるダージリンに向かう汽車に乗っていた際に「全てを捨て、最も貧しい人の間で働くように」という啓



示を受けたといえます。彼女は修道院を離れて活動を行う許可を求めすがバチカンの修道会管轄庁などカトリック教会の上層部は彼女の申し出に慎重に対応し、すぐには彼女の活動に認可を与えませんでした。それでもテレサは自分の召命の道を忠実に進もうと決意していました。そして1948年、ようやく教皇・ピウス12世からの修道院外居住の特別許可が与えられます。テレサは修道院を出て、カルカッタのスラム街の中へ入っていったのです。

彼女はインド女性の着る質素なサリーを身にまとい、手始めに学校に行けないホームレスの子供たちを集めて街頭での無料授業を行います。やがて彼女のもとに聖マリア学院時代の教え子たちがボランティアとして集まり始め、教会や地域の名士たちからの寄付が寄せられるようになり、1950年に修道会設立の許可を得ます。これが「神の愛の宣教者会」です。この修道会の目的は「飢えた人、裸の人、家のない人、体の不自由な人、病気の人、必要とされることのないすべての人、愛されていない人、誰からも世話されない人

のために働く」ことでした。

本日は、先週のヨハネによる福音書 21 章の 1 - 14 節の続きですが、やはり

弟子たちの宣教者としての召命をテーマにしています。



1 - 14 節で

は、弟子たちは、復活の主イエスから受けた召命をよそに、漁師に戻っている姿が描かれました。しかし彼らは、夜通し漁を続けたものの、魚はとれず、漁は不漁に終わり、弟子たちは徒労のうちに夜明けを迎えようとしていました。そんな不毛な一夜の明け方近く、弟子たちは、なつかしい主イエスの声とおぼしき声に従って、船の右側に網を降ろしたのです。大漁にふくれ上がった魚の網を引きながら、彼らは、その声の主が主イエスあることに気がつきます。不毛な一夜の経験が出会いの朝にかわります。この経験を通して、主が共におられることに目を開かれた弟子たちは、主と主の言葉が彼らの力の源であることを再認識するのです。主イエスは、「不毛」の中でわたしたちに語り、「不毛」

の向こう側から、「不毛」の直中でわたしたちに出会われる方なのです。こうして弟子たちは、自分たちの召命と、その召命を全うする力の源をもう一度確認したのでした。弟子としての歩みは、主を再確認したところから、真にスタートを切るのです。そして主の言葉の導きと招きこそが、わたしたちの道しるべなのです。

その主は、まずは弟子たちを、その時、彼らに最も必要なものに導きます。「さあ、来て、朝の食事をしなさい」。これが主の言葉の指し示したものでした。つまり、



主イエスとの交わりの回復から使命への第一歩が始まるのです。教会は、その始まりから、主イエスと食卓を共にする、食卓共同体(聖餐共同体)としての特徴を持っていました。教会は「食卓の共同体」として、「主の食卓」を中心に、「食卓に始まり食卓に帰る」共同体として存続してきたのです。食卓において、喜びを表し、食卓において慰めを与えられ、食卓において自

会は、その始まりから、主イエスと食卓を共にする、食卓共同体(聖餐共同体)としての特徴を持っていました。教会は「食卓の共同体」として、「主の食卓」を中心に、「食卓に始まり食卓に帰る」共同体として存続してきたのです。食卓において、喜びを表し、食卓において慰めを与えられ、食卓において自

分の使命を確認してきたのです。

本日の箇所は（先週の箇所の続きですが）、食事によって確認された親しい交わりの中で、弟子たち（ペトロと愛弟子）が将来担う使命を、主イエスが確認しておられます。焦点はこの二人の弟子に絞られています。ここでは、ペトロの使命がもう一步踏み込んで語られています。さらにもう一人の弟子（イエスの愛しておられた弟子、愛弟子）の出現によって**使命を担うということのもう一つの側面が語られることになるのです**。

まず主イエスとペトロの対話を見てみましょう。15－17節の両者の対話では、主イエスがペトロに与えた使命が確認されています。神が与えた使命は、時に、確認される必要があるのです。しかしそれは厳しい尋問のような形で確認されているわけではありません〔内容的には勿論ペトロにとって厳しいものですが〕。食事によって確認された親しい交わりを基礎にして使命が確認されているのです。ペトロの他にも弟子たちがいました。しかし主イエスはペトロと**一対一**の交わりの中でペトロの使命を確認しておられるのです。

主イエスはペトロの出自（素性）、つまりヨハネの子シモン（共観福音書ではバルヨナ〔ヨナの子〕シモン）という事実をも引き合いに出しておられます。それはペトロの誕生から始まる彼の存在の全体との関わりで、ペトロが将来担う使命（**わたしの羊を飼いなさい**）を確認しておられるということなのです。当然ながら、一人ひとりの使命は違うのです。タラントンの譬えが教えるように、神が創られた人で使命を持たない人はいないのです。他人の成功や能力に対する嫉妬や羨望がなくなるのは、自分の使命が主イエスとの**一対一**の交わりの中でしっかりと確認されたときなのです。



しかしここでは、使命を全うするための能力がペトロにあるか否かを主イエスは問題にしておられないことは大切です。それぞれの能力があることは、当然のことだからです。使命を全うするために必要な基準は、「あなたはわたしを愛しているか」という主イ

イエスの問いが示しています。つまり主に対する愛はすべての仕事の力量や技術に優先するのです。それが大切なことであるがゆえに、「あなたはわたしを愛しているか」



という質問が3回も繰り返されているのです。もちろんこの3回という回数は、ペトロが3回

主イエスを否認したことに対応しています。

しかしペトロは「わたしはあなたを愛しています」とは答えられ



ません。主イエスを裏切ったという事実が、ペトロにそれを許さないので。彼は、間接的な言い回しで答えます。

(1)主イエスが「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」(v.15)と問われると、ペトロは「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」(v.15)と答えます。そして「わたしの小羊を

飼いなさい」(v.15)という主イエスの言葉が続きます。

(2)2回目に同じ質問が「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか」(v.16)と繰り返されると、やはり「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」(v.16)と答えます。そして「わたしの羊の世話をしなさい」(v.16)という主イエスの言葉が続きます。

(3)そして3回目も「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか」(v.17)と繰り返される問いに、「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます」(v.17)と答えます。そして「わたしの羊を飼いなさい」(v.17)という主イエスの言葉が続きます。この3回目のペトロの返答に、「わたしはあなたを愛しています」と断言できない彼のすべての気持ちが言い表されています。おそらくペトロの心の中には「(イ)主よあなたは、わたしのあの失態も、否認も、今までの罪も、すべてのマイナスも、あなたはご存じです。(ロ)それにもかかわらず、依然として、わたしの中に主を思う思い

の消えていないこともよくご存じです」「**何もかも**」という思いがあったでしょう。

《何もかもご存じです》という言葉の中にはペトロ自身がどんなに弱く罪深いものであり、その罪のゆえに主イエスを見捨て見殺しにしたということもご存じです、ということも含まれていますし、しかもこの言葉の中には、このような罪を犯したペトロを主イエスが愛し、神が共にいてくださるといふ赦しを明らかにしてくださり、復活の主イエスの語りかけによって、罪人を赦す神を信じます、というペトロの言葉にならない告白も入っているのです（参：新共同訳注解）。

つまりここで確認されているのは、使徒としての、また主に仕える奉仕者としての力量ではなくすべてをご存じの主イエスとの関係なのです。それこそが、使命を全うするための基礎なのです。

実は日本語で「愛している」と訳されている言葉は二種類使われ



ています。〈アガパオー〉という言葉と、〈フィレオー〉という言葉です。〈アガパオー〉は、神が人間を愛する絶対的な〔神的な愛を表現する〕用法が多いのです。一方〈フィレオー〉は、人間相互の友情を表す言葉です。

1回目の質問で、主イエスが〈アガパオー〉を使って、ペトロに神的な愛でわたしを愛することができるかと聞きますと、ペトロが友を大切にするような思いであなたを愛していることは、あなたがご存じですと〈フィレオー〉を使って答えます。そのペトロの気持ちは理解可能です。彼は胸を張って、主イエスを愛するとは言えないのです。ましてや、〈アガパオー〉を使って、神の愛に匹敵するような愛で愛することなどできないのです。2回目の質問も同じです。主イエスが〈アガパオー〉を使って、ペトロに神的な愛でわたしを愛することができるかと聞きますと、ペトロが友を大切にするような思いであなたを愛していることは、あなたがご存じですと〈フィレオー〉を使って答えます。

そして3回目です。3回目にいたって主イエスはついに〈アガパ

オー〉という言葉を使わずに、〈フィレオー〉を使ってペトロに、友達を大切にするような思いで「わたしを愛するか」と尋ねます。するとペトロは三度も問われたことに悲しみを覚えながら、〈フィレオー〉わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じですと答えます。この答えはペトロの小心さを示す答えではないのです。それはかつて、主イエスが苦しみに遭うなら、自分はこの生命さえ投げ出しても構わない、と自分自身の限界を無視して発した、大言壮語に近いような無鉄砲な言葉ではありません。自分を知った〔自分を知らされた〕人の言葉です。そのようなペトロに、主イエスは、最初の1回目、2回目は〈アガパオー〉で、本来的な基準を示しながらも、3回目は〈フィレオー〉を使って、ペトロの限界まで下りてこられるのです。ペトロの使命、つまり「**わたし〔主イエス〕の羊**



を飼いなさい」は、ペトロの限界を承知の上で語られているのです。

しかし、近年のヨハネ福音書研究の主張は、この〈アガパオー〉と〈フィレオー〉という言葉は、の交換可能な言葉であって、大きな意味の違いをもっていないと主張しています。

	1回目	2回目	3回目
イエス	アガパオー	アガパオー	フィレオー
ペトロ	フィレオー	フィレオー	フィレオー

おそらくこれは違うと思います。近年の主張では、ヨハネは単に同じ言葉の繰り返しを嫌って、同種の意味を持つ別の単語を使っていると説明されます。しかし、元来どちらの単語を使ってもよかったのなら、全部同じ言葉を使ってもよかったのです。全部〈アガパオー〉を使ってもよかったし、全部〈フィレオー〉を使ってもよかったのです。しかし用語を選択するということは、そのように簡単に退けてしまうことのできない微妙な意味の違いを醸し出しているのであって、その違いは、著者ヨハネによって意識されている、と考える方が自然です。主イエスは〈フィレオー〉という言葉とともに、ペトロの限界まで下りてこ

られたのです。ペトロの使命、つまり「わたし〔主イエス〕の羊を飼いなさい」は、ペトロの限界を承知の上で語られているのです。

羊飼いと羊との関係はヨハネの10章に明らかに示されています。そこには、「良い羊飼いは羊のために命を捨てる」と書かれています。イエスの存命中、イエスが羊飼いで弟子たちが羊であると同時に、今度は弟子たちが良い羊飼いとして派遣されるのです。そしてペトロは、良い羊飼いである主イエスと同じく、命を懸けて羊を飼う人になっていったのです。

そのペトロの将来について、主イエスは次のように語られます。
21:18 はっきり言うておく。あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。」 21:19 ペトロがどのよう

な死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとして、イエスはこう言われたのである。このように話してから、ペトロに、「わたしに従いなさい」と言われた。

18節の冒頭の言葉「はっきり言うておく」は、ヨハネ福音書のみに使われる表現法です。直訳すると「アーメン、アーメン、わたしはあなたに言います」。主イエスは、ふつう祈りや宣言の最後に付けられる「アーメン」（まことにその通り）という言葉で、新しい教えを導入したり、重要な教えを述べるときに発言の最初で使われるのです。特にヨハネ福音書は、2回つづけて「アーメン、アーメン」（ダブル・アーメン）の形で使われます。ここで厳粛にペトロに語られているのは、(1)使命は主に従うことによって全うされるということ。そして、(2)その使命が、自分の意思に反する仕方で全うされることがあるということです。「両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる」（v. 21）という表現は、ペトロの十字架の死を暗示している、と推測されています。つまり「両手を伸ばして」



とは、十字架に磔にされる者の姿勢であり、「帯を締められ」るのは、捕縛、連行、十字架に縛り付けることを暗示しているということです〔聖ペトロ十字＝逆さ十字〕。そのような者が「行きたくないところへ連れて行かれ」るのは、当然のこととなります。そしてこれらのことを総括するように、19節は次のように言うのです。「21:19ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとして、イエスはこう言われたのである。」かつてイエスを否認したペトロも自分の十字架を担うものとなるのです。神の栄光を現すということに「死ぬ」という〔一見マイナスの事柄に見える〕ことが視野に入れられているのです。



死ぬということは人生で最大のマイナスではないのです。もちろんすべての人が死ぬことによって神の栄光を表すわけではありません。ここで大切なのは、どのような使命であれ「主に従う」ことによってのみ実現されていくという

ことが大原則です。問題は何か目に見える成果が上がっているかということより、「主に従っている」かどうかが問題なのです。わたしが「主に従う」ということは、他人の使命のほうが重いとか軽いとかという事とは別のことなのです。問題は、人がどうかではなく自分は一步一步「主に従っている」かということなのです(v.22)。

20節でイエスの愛した弟子(愛弟子)が登場すると、今主イエスから「わたしに従いなさい」(c.19)と言われたばかりのペトロは反応します。21:21 ペトロは彼を見て、「主よ、この人はどうなるのでしょうか」と言った。21:22 イエスは言われた。「わたしの来るときまで彼が生きていることを、わたしが望んだとしても、あなたに何の関係があるか。あなたは、わたしに従いなさい。」

ペトロのキリスト者としての生涯は、ガリラヤ湖での主イエスとの出会いと召命によって始まったのでした。マルコはこう記しています。イエスは、「わたしに従って(ついて)来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた(1:17。cf.ルカ5:1-11)。彼はイエスの弟



ガリラヤ湖畔にある「ペトロの召命教会」

子たちのリーダーであり、弟子集団の中心にいて、常に筆頭に名前が記される人物です（マタ10:1-4、マコ3:16-19、ルカ6:14、使徒1:13）。彼はフィリポ・カイサリアで、主イエスについて見事に「あなたは生ける神の子キリストです」と告白して、主イエスから「ペトロ」（岩）と命名され、天の国の鍵を託された人物です（マタ16:13-20）。またその直情径行で衝動的な性格のゆえに、失敗の多かった人でも

あります。主イエスが湖の上を歩いてくるのを見れば、自分も同じようにさせてくれ、と主イエスに願い出て、湖の途中で恐くなって危うく溺れそうになって、助けを求めたこともあるのです。また、主イエスの身に危険が迫っていることを聞けば、自分は御一緒に死んでも構わないと言いながら、イエスが逮捕されて、大祭司カファファの館で裁きの座に立たされると、後から様子を見るためについて行きながら、弟子であることを指摘されると、三度もイエスを知らないと否認して、ついには逃げてしまう（敗走してしまう）人物なのです。

しかしこの多くの失敗を重ねたペトロが、初代教会の指導者となったということは、意義深いと思います。ペトロは新約聖書によれば、(1) 初代教会の宣教の指導者（使徒1:15、2:14）であり、「異邦人への使徒パウロ」に対して「ユダヤ人の使徒ペトロ」と呼ばれる人物であり、(2) エルサレム教会の柱（ガラ2:9）とも呼ばれ、異邦人伝道進展のきっかけとなった(3) エルサレム会議のエルサレム教会側の代表者でもありました



(使徒15章、ガラ2:9)。

ペトロに関する伝説によりますと、彼は、やがて(1) ローマ教会の大監督となり、その指導力を発揮して初期のキリスト教会の草創期を支え、(2) ローマ皇帝ネロの時代(60年代)に逆さ十字架につけられて殉教したと伝えられています。ヴァチカンのサン・ピエトロ大寺院は、聖ペトロの墓の上に建てられていると伝えられています。ペトロの生涯がわたしたちに教えてくれることは何でしょうか。従うということに、常に失敗がつきまといっているということが分かります。そして、従うということが、一生もの〔一生かかって成し遂げられていく〕という事が分かるのです。

そしてペトロに使命が与えられたように、人にはそれぞれ使命があるのです。イエスの愛された弟子(愛弟子)が登場するとペトロは



敏感に反応しました。「主よ、この人はどうなるのでしょうか」。

「自分より神に愛されているように見える他者」の存在は常にあるものです。私は愛されていないのではないかという心理を誘うものがあるのです。しかし、人にはそれぞれの召命〔使命〕があります。一人一人の召命があります。

中世カトリックでは、召命とは聖職者になるということと考えられていました。プロテスタント(ルター)がこの概念を根底から変えてしまいます。召命に関する中世カトリックの理想は、何を食べるか、何を着るかということに終始する現世的煩いからの解放されて、もっぱら禁欲的で、聖なる修道生活に没頭することでした。その現世離脱の理想が修道院を生み出します。

しかしルター(プロテスタント)は、現世のただ中で(こそ)神に喜ばれる、清い生活を目指すべきだと主張します。それを「現世内禁欲」と申します。しかしそのためには、二次的で、卑しいものとさえされる、く食べて着るために働



いて〉という職業の問題が解決されなければなりません。つまり**職業倫理**〔仕事をどう見るか〕が**問題**となったのです。そのためにルターは〈ベルーフ〉Beruf という概念を導入します。Beruf という言葉はドイツ語ですが、まずは(1)**職業**と訳される言葉です。宗教的な側面を考慮する場合は、(2)**天職**という意味で使われます。完全に宗教的な文脈では(3)**召命**という意味を持つ言葉なのです。つまりルターによれば、**いかなるものであれ職業 Beruf は（牧師であれ何であれ）神がその人にふさわしく与えた召命 Beruf なのである**。この Beruf の概念に注目して、〔これにカルヴァンの「予定論」を加えて〕資本主義の誕生を論じたのが、Max Weber（マックス・ヴェーバー）の『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』です。プロテスタントの「**職業倫理**」（神の Beruf 職業・召命に忠実に生きる）が「**勤勉・儉約**」をうながし、それによって利益（もうけ）が



で「**資本が蓄積**」され、蓄積された資本が再び事業に「**資本投入**」されると、この資本がさらに利益（もうけ）を産み出し「**資本が再生産**」される。こうして**資本主義**が誕生した、という理論です。

しかし人生には職業だけでなくそれぞれの召命〔使命〕があるのです。主婦には主婦の、ご老人にはご老人の。ご高齢の方は教会にいてくださるだけでボランティアをしてくださっているに等しいという「イルボラ」、来てくださるだけでもボランティアという「クルボラ」から、もちろん何かを一生懸命する「スルボラ」まで、それぞれの限界を持ちつつ、一人一人に自分のかうべ羊が与えられているのは幸いなことです。

わたしたちの教会も、主に従うものたちの群です。それぞれの召命〔使命〕があるのです。主「イエスの愛しておられた弟子」がついてくるのを見て（v.20）、ペトロは「**主よ、この人はどうなるのでしょうか**」（v.21）と問いました。それに答えて主イエスは、「**わたしの来るときまで彼が生きていることを、わたしが望んだとしても、あなたに何の関係があるか。あな**

たは、わたしに従いなさい」と言われるのです。それぞれの召命〔使命〕があるのです。その召命に生きるとき、他人の成功や能力に対する嫉妬や羨望がなくなるのです。むしろ他の人に与えられた召命〔使命〕に敬意を払うようになるのです。

主「イエスの愛しておられた弟子」にも召命〔使命〕が与えられました。その一つは、ヨハネによる福音書を〔全部か一部かを〕執筆することだったようです。24節。「これらのことについて証しをし、それを書いたのは、この弟子である。わたしたちは、彼の証しが真実であることを知っている」〔「わたしたちは」ヨハネ福音書の最終編者か〕。それぞれには召命〔使命〕があるのです。皆さんには召命〔使命〕があるのです。皆さんには教会員としての召命〔使命〕があり、(1) 与えられた賜物を持って互いに仕え合うこと、と同時に社会人として、(2) その職業や立場において社会的に担う召命〔使命〕があたえられているのです。

わたしたちの信ずべきことは何でしょうか。まず(1)主がこの教

会の牧者であること。一人一人を牧しておられるのは主であるということです。そして(2)牧師も信徒も主に従い、自分の召命〔使命〕をまっとうするという意味では同じ立場にいるということです。その結果(3)それぞれが主に従うことによって一つにされていく群が教会だということです。一つにされていくことによって、よりよく社会と歴史に影響を残していく存在になっていくのです。

それでは新しい1週間の歩みのために祈りましょう。

2020.4.19 日本基督教団千歳丘教会

